

グ・ルネッサンス期が占める位置に関しては興味深い諸点が浮かび上がると思われる。前者については、清水氏も、アルクインの三位一体論、filioqueと養子論について触れておられるが、ゴットシャルクとヒンクマルの trina deitas に関する論争もそれに劣らず重要であり、この論争においてヒラリウス、アンプロシウス、アウグスティヌス、ボエティウスの著作が引用されている。三位一体の理解またその表現に関する議論が再び活発化するのには11世紀である。フェカンのヨハネスのように、アウグスティヌスとアルクインの伝統をそのまま継承するものもある一方、アンセルムスのように大胆な方法によって三位一体を論じる者も登場する。彼の *Monologion* は中世においては *De trinitate* と呼ばれていた。また彼は、ロスケリヌスを論駁するために *Epistola de incarnatione verbi* を、ギリシア教会との関係では *De processione spiritus sancti* を著した。さらに、ロスケリヌスは三位一体論に関してアベラルドゥスを論駁し、このアベラルドゥスをサン＝ティエリのギョームが論駁する。紙面の都合上、これ以上のことを述べることはできないが、11-12世紀の知的世界で生じた様々な問題は、その淵源をカロリング朝に見出すことができるように思われる。

いずれにせよ、上述のように、古代末期の問題群を整理し、カロリング朝におけるそれらの受容、展開そして影響を明らかにしていくことが今後の研究の課題となろう。現在の日本の中世哲学会においては、この分野の研究者はかなり手薄の状態であると思われる。今回のシンポジウムをきっかけとして、こうした領域の研究が積極的に行なわれることを期待する。

意見

森 泰 男

古代はいつ終わり、中世はいつ始まったのかということに関しては、西欧史と哲学史とでは事情が異なっている。すなわち、西欧史における古代は、一応西ローマの滅亡(476年)によって終わったと見做してよいであろう。そして、中世の成立は早くても9世紀であろう。それに対して、哲学史における古代の終末は6世紀であるが、中世哲学の遠い出発は紀元1世紀のアレクサンドリアに求められる。その限り、最初の数百年間は、古代末期の哲学と最初期中世哲学とが併存していた。山田晶氏は

「中世哲学の基本的性格」という論文において、ウルフソンに依拠しつつ、中世哲学の始まりをアレクサンドリアのフィロンに求められた（『理想』1969年8月号所収）。中世哲学は、ユダヤ哲学・キリスト教を背景に持つ哲学（教父哲学とスコラ哲学）・イスラム哲学の三者を包含している。いずれも宗教を背景に持っている。教父研究のおもしろさは、古代のギリシア・ローマ思想、古代イスラエルの教えを受け継ぎ発展させたユダヤ思想、それらを吸収・摂取しつつ展開された教父思想三者のせめぎ合いにある。古代から中世への移行は単なる世代交替でもなければ、一方的な伝授と継承でもない。アラン・ド・リベラの『中世哲学史』はユダヤ哲学とイスラム哲学を包めて、中世哲学史をダイナミックに描いている。

しかし他方、アラン・ド・リベラはアウグスティヌスには特別な章も節も設けていない。本学会において、最も多くの研究発表がなされてきたのは、アウグスティヌスとトマス・アクィナスである。もちろん、最近では研究の裾野は広がり、様々の中世哲学者の研究が盛んになされている。しかし、依然としてその重要性からいえば、先の二人を東西の横綱として挙げねばならないであろう。ところが、アウグスティヌスが中世哲学の土俵から下ろされようとしている(?)。確かに、アウグスティヌスが生きていた時代は歴史的に言えば中世ではない。エルンスト・トレルチによれば、アウグスティヌスの時代は「キリスト教的古代」(die Christliche Antike)であるという（『アウグスティヌス——キリスト教的古代と中世』参照）。

問題はその後である。ゲルマンの民族大移動によって、古代世界は終焉を迎え、西欧における文化・文明は地に落ちた。トマス・カヒルは『聖者と学僧の島』において、古代文明の没落後の衰れな姿をアウソニウスにおいて確認するが、逆に、アウグスティヌスにおいて古代世界の最後の花を見付けている。カヒルによれば、アウグスティヌス後の西欧世界において、古典古代の学問を保存し、独自の文化を展開しつつ、疲弊している西欧に古典古代の学問を贈り返したのは、アイルランドの修道士たちであったという。確かに、古代末期と中世の間には谷間あるいは裂け目が横たわっている。しかし、アイルランドの修道士たちはそのギャップを越えて、古代の文化を民族大移動後のヨーロッパ大陸に伝え、古代と中世の間の橋渡しの役を果たしたのである。

ポエティウスは古代最後の大哲学者である。問題はアウグスティヌスとポエティウスの関係である。ポエティウスはアウグスティヌスから何かを受け継ぎ、それを発展させたのであろうか。それとも、無関係だったのであろうか。今後の課題としたい。

アウグスティヌスが最後まで取り組んだのは、ペラギウス派との論争である。そして、その問題はアウグスティヌスの死を越えて続いた。とくに、南フランスにおける論争は重要である。この論争一つを見ても、古代末期と中世初期の間には、知の断絶よりも問題の継承と知の変わらない営みがある。そこには、知の単純な連続はないとしても、いわば知の不連続の連続を認めねばならない。そこでは、太い実線は引けないとしても、はっきりとした破線は描けるのではないかと思われる。

意見

加藤 和哉

古典古代の知の営みは「暗黒の中世」において窒息させられ、その再生を掲げた「ルネサンス」とともに近代が始まるという思想史を受け入れるものは、さすがに中世哲学研究者にはいないであろう（それは一般には、いまだ完全に葬り去られたとはいえないとしても）。だがこれに対して、中世においても、古代哲学の精神が確かに継承され、豊かな展開を見せたということを強調する場合（そしてそれがそれ自体としては正しいとしても）、そのことだけでは必ずしも、前者と同じ陥穽を免れているとはいえない。なぜなら、断絶と再生を語るにせよ、連続的發展を語るにせよ、その変化（ないし同一性）の基体として、古典古代から西洋中世がひとつの全体をなすことを前提しているという点で、違いはないからである。

このような知的中心の「移動」という理解が、一つの西洋中心主義的なイデオロギーに基づく固定観念に過ぎないということへの反省は、既に始まってはいるが（たとえば、Alain de Libera, *La philosophie médiévale*, Paris: Presses Universitaires de France, 1993, p. 6）、同じイデオロギーを共有するのではないわれわれも、そのような見方からどれほど自由であるだろうか。今回のシンポジウムの標題に掲げられた「古代末期からカロリング・ルネサンスへ——知の断絶か連続か」という問題意識においても、そこで思い浮かべられる「古代」と、カール大帝の時代とは、どのように並置させられていたのか。この点で、清水氏が提示された年表は、はからずも、われわれの中世哲学研究の現状の見取り図を示すことにもなったように思う。古典古代への関心は、アルプス以南の東地中海世界に注がれ、ガリアやブリタニアの「古典古